

東日本大震災救援募金会計 総額 1,336,832,789 円

国内 955,957,784 円 海外 380,875,005 円 2015 年 1 月 31 日現在

東日本大震災救援対策委員会会計、

東日本大震災救援対策本部会計中間収支計算書（単位：円）

総合計	
2011 年 3 月 12 日～15 年 1 月 31 日	
【収入の部】	
繰 入 金	50,000,000
海外募金収入 *1	380,875,005
国内募金収入	955,957,784
集会等参加費	429,327
雑収入	303,919
繰入金収入	196,896,919
長期借入金収入	370,000,000
長期貸付金回収収入 *2	125,350,629
当年度収入合計 (A)	2,079,813,583
前期繰 越 収支差額	
収 入 合 計 (B)	
【支出の部】	
救 援 金 *3	244,461,758
会堂牧師館再建補助金 *4	446,148,429
見 舞 金	1,943,000
委 員 会 費	8,530,417
渉 外 費	1,814,984
人 件 費	103,673,747
事 務 費	72,510,504
活 動 費	17,048,202
車 両 費	13,290,821
建 物 費	13,241,982
繰入金支出	196,896,919
長期貸出金支出 *5	600,856,129
積立て預金支出	50,767,539
救援対策基金戻入金	50,000,000
長期借入金返済支出	150,000,000
当年度支出合計 (C)	1,971,184,431
当年度収支差額 (A)-(C)	108,629,152

こひつじキャンプ in 台湾

第3回 こひつじキャンプ in 台湾(台南)

新しい年を迎えて間もない 1 月 4 日（日）～7 日（水）、福島県在住の親子 6 家族・20 名とスタッフ 5 名の計 25 名は、PCT（台湾基督長老教会）の招きで三度台湾を訪れました。第 1 回の嘉義（嘉義中会）、第 2 回の宜蘭（七星中会）に続く今回の第 3 回キャンプは、台南（台南中会）がキャンプ地でした。PCT による心のかもった歓迎は、今回も参加した親子の心をしっかりとつかみました。保護者の感想文を紹介します。

* 1 海外募金内訳		
14.9.1	台湾基督長老教会献金 アジア学院建築工事支援金	1,000,000
14.12.26	EMS からハートフル釜石へ	4,062,947
15.1.26	EMS からハートフル釜石へ	4,592,414
* 2 長期貸付金回収		
14.9.10	東北 川俣教会	545,000
14.10.14	チャペル建築資金貸付金 返済 (1) アジア学院	1,000,000
14.12.9	東北 常磐教会	1,750,000
14.12.17	東北 仙台ホサナ教会	702,000
14.12.22	東北 三春教会	100,000
14.12.26	清愛幼稚園（四條町教会）	500,000
15.1.27	東北 郡山細沼教会	1,300,000
* 3 救援金		
14.9.18	7/19～21 第 12 回こひつじキャンプ in 山中湖	1,186,670
14.9.18	7/22～24 第 13 回こひつじキャンプ in 妙高高原	1,347,841
14.9.24	PCT からアジア学院への指定献金	1,000,000
14.9.24	被災児受け入れ支援 (UMCOR 2014)	1,565,220
14.10.15	9/13～9/15 第 14 回こひつじキャンプ in 山中湖	1,150,742
14.11.18	室内遊具支援	7,188,384
14.11.21	11/1～11/3 第 5 回こひつじキャンプ in 山中湖	1,292,036
14.12.1	室内遊具支援	1,000,000
14.12.9	「いずみ」積算放射能・線量計 10 台分購入補助	268,000
14.12.22	郡山サベリオ学園「わいわいキッズクリスマス会」YMCA への協賛金	100,000
14.12.26	1/4～1/7 第 3 回こひつじキャンプ in 台湾	2,578,755
* 4 会堂牧師館再建補助金		
14.9.18	東北 いずみ愛泉教会	500,000
14.10.1	関東 宇都宮上町教会	35,000,000
15.1.29	水戸中央教会会堂再建事業中断で返金	55,000,000

第3回 こひつじキャンプ in 台湾（台南）の思い出

まだまだ福島は問題が山積みで、先の見えない不安があります。土はさわってだめ、外で遊んでだめ、甲状腺検査、ホールボディ血液検査……。子どもたちは血液検査で血を抜かれるのがいやで、よく「いつまでこの検査しなくちゃいけないの」「福島に生まれなかったらやらなくてもいいの」と言われたこともあります。いろいろがまんしてきた子ども達……。台湾では半袖で汗をかきながら外で遊んだり海で遊んだり、本当に久しぶりにかけ回っている子ども達の姿を見ました。

子ども達にとって台湾ははじめてで、見るもの、食べるもの、言葉や文化、弓矢や焼きいも作り、舟でマングローブ林鑑賞、すべて驚きで、今回のキャンプは一生忘れない思い出となり、成長するうえで良い経験になったと思います。

温かく私達を迎えてくれた多くの (PCT の) 方々の支えで、私達を受け入れていただいているんだなと強く感じた 5 日間でした。本当にありがとうございました。(T.H.)

飯島 信

東日本大震災緊急救援募金・東日本大

震災救援募金教区別集計表（単位：円）

【2011 年 3 月 15 日～2015 年月 1 月 31 日】

教区	件数合計	金額合計
北海	173	6,749,212
奥羽	200	7,694,352
東北	98	3,625,799
関東	1200	70,673,823
東京	2245	243,129,958
東京教区	17	5,217,591
東京・東	380	35,500,969
東京・西南	612	93,966,512
東京・南	222	36,073,825
東京・北	391	29,128,323
東京・千葉	623	43,242,738
西東京	967	92,436,933
神奈川	759	62,863,194
東海	732	194,236,623
中部	809	79,451,534
京都	108	10,767,635
大阪	593	40,294,287
兵庫	131	11,188,066
東中国	139	7,447,755
西中国	230	21,889,625
四国	455	20,919,011
九州	463	22,296,431
沖縄	126	2,781,625
個人・他	1,370	57,511,921
総計	10,798	955,957,784

* 5 長期貸出金		
14.9.18	東北 いずみ愛泉教会	500,000
14.10.1	関東 宇都宮上町教会	32,500,000
15.1.9	聖和学園園ヶ崎幼稚園	10,000,000



■台北の超高層ビル「101」の前で

参加した親子からは素晴らしい感想文が寄せられ続けています。国内キャンプも含めれば 16 回を数える「こひつじキャンプ」です。国内外からの献金をもとに続けられているこのキャンプが、原発被災地福島親子にとって、今日、そして明日を生きる励みとなることを願っています。



日本基督教団

東日本大震災救援対策本部ニュース Vol. 16

2015 年 2 月 23 日発行

169-0072 東京都新宿区大久保 1-7-18-4F T/F 03-3205-6088 救援対策本部長 石橋秀雄

■「わたしたちの助けは 天地をつくられた主の御名にある」■

今年も、3 月 11 日午後 2 時 46 分、この時が近づいて来ました。昨年「また、3 月 11 日がやってくる。恐ろしい、どう迎えていいかわからない」と被災地の方からお聞きしました。年月が過ぎても心の深みにある痛みは消える事はありません。2015 年 3 月 11 日を前にして、被災者の方々のために祈りを深めなければならないと思っています。

■ 10 億献金を終了します – 2015 年 3 月 31 日をもって – ■

日本基督教団は 2011 年 7 月 1 日～2015 年 3 月 31 日を期限として 10 億献金と呼ばけました。東日本大震災救援対策本部には宣教協力学校協議会、日本キリスト教社会事業同盟から委員を派遣していただき、キリスト教学校、キリスト教福祉施設の協力の下に日本基督教団教会・伝道所が一致し、深い祈りをもって救援対策に取り組んで来ました。

当初 10 億献金は無謀と思える額でしたが、現在約 9 億 5 千 5 百万円の献金が与えられています。主の憐れみの中で、不可能と思える献金が与えられました。3 月 31 日までに 9 億 7 千万円を超えて 10 億円に近づく献金となることが予測されます。

教会被害については、当初 30 教会・伝道所の被災が報告され、被害総額 10 億円と予想して、献金の呼びかけをしました。現在、建て替え、大規模修理など行ってきましたが、すべての被災教会の復興に必要な金額が与えられました。

■被災者支援センターと福島原子力発電所の事故による放射能被災者支援■

■ 2017 年まで活動を継続 ■

日本基督教団は釜石、石巻、仙台に被災者支援センターを設置し活動を行ってきました。現地スタッフの献身的働きによって地域の信頼を得て、支援活動が続けられたことを感謝致します。現在の支援の中心は仮設住宅に住んでおられる被災者への支援が中心になっています。仮設住宅から出られない方々の状況が深刻化しています。被災者支援は海外からの献金 3 億 8 千万円と国内献金を用いて取り組んで来ました。

■ 2017 年まで被災支援を行います ■

原発事故による放射能被災者支援は、短期保養プログラムを中心に行ってきました。「東北教区放射能問題支援対策室いずみ」が活動をしています。宮城県南部を中心に子ども達の甲状腺検査を行い、地域の被災者から期待されています。子どもの命を放射能から守る活動の継続は重要です。教団の被災者支援が終了した後も教団としてこの活動を支援し続けることが出来ればと願っています。

日本基督教団は「東日本大震災国際会議」－原子力安全神話に抗して－をテーマに国際会議を開催、参加者の会議への高い評価とその会議で採択された声明は世界の教会の注目を集めました。

■信仰の一致によって■

2011 年 3 月 14 日、わたしは、被災地に行き、凄まじい津波の破壊の中をトボトボ、言葉を失って歩く中で一つの御言葉を口にしていました。「わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある」（詩篇 124 編 8 節）、絶望の淵から立ち上がった信仰者の断固たる信仰告白です。

第 1 回目の被災地訪問から帰って、ただちに東日本大震災に対する議長声明を出しますが、冒頭にこの御言葉を掲げました。教団が大災害の課題に取り組む中で、この信仰の確信へ導かれるとの確信を持って被災対策に取り組んで来ました。

「信仰の一致のもとに伝道協力」、「信仰の一致のもとに伝道する教会の建設」と訴えています、この教団の課題は被災地支援に懸命に取り組む中で示されました。

日本基督教団の教会・伝道所そしてキリスト教学校とキリスト教福祉施設の熱い祈りとご協力によっ東日本大震災救援対策に取り組むことが出来た事を感謝致します。

総会議長

救援対策本部長

石橋秀雄

東北教区のいまとこれから

小西 望
(東北教区議長)

釜石での支援活動のこれから

平田信之
(ハートフル釜石専従者)

まもなく大震災発生より4年を迎えます。津波被災地は公共事業を中心に復旧が進みつつあるように見えます。が、個々の生活の再建はまだまだこれからの課題です。宮城県では仮設住宅入所者がまだ約7万人に及ぶ中で、あと1年ほどで原則退去という方針が示されました。それは、被災者の実態を見ないものだとの批判もあがっています。原発事故の憂いは今後長期に及びます。事故の原因・実態・対応のどの局面においても「想定外」のことがなお明らかになる中、全力を挙げた対応が必要であるにもかかわらず、国は経済活動を中心とした「復興」を追い求めています。社会もこれに追随する中、汚染の渦中にある者が心配や思いをあらわすことが困難になってきています。

でも私たちはなおこの地を主が愛し、生きて働いておられることを仰ぎ、教会の働きを通じてそのことを証しし従って参りたく願います。

当教区は現在展開している教会救援復興委員会・被災者支援センターエマオ・放射能問題支援対策室いずみの働きを、少なくとも2017年3月まで継続することを総会で議決しています。教団、全国さらには世界に連なる諸教会がこれを受けとめ、お支えくださっていることに励まされています。

当教区では、7割以上の教会が建物被害を受けました。内19教会が会堂・牧師館の再建もしくは大規模修繕を余儀なくされましたが、その多くが教団からの支援を受け、すでに全教会が工事を完了しましたことを感謝と共に報告します。ただし、多額の借入金返済がこれから続きます。諸教会とも教会員が弱さ・疲れを抱えている中、今後とも互いに支え合いたいと願っています。教団にあっても、理解と配慮を願います。放射能汚染により立ち入りが制限されている小高伝道所・浪江伝道所は平常活動を再開することができず、見通しも立っていません。どうぞお祈りにお覚えください。

仙台ならびに石巻に拠点を置く被災者支援センターエマオの働きは、復興ワークから仮設・復興住宅での生活支援、コミュニティサポート、「ささっこ」「いしのまきっこ」と



いった子ども会活動などに重点が移りつつあります。厳しさの中にも喜びを見いだし、互いにつながり、支え合おうとの諸活動です。散らばった仮設住宅等を訪ね、ニーズを汲みとり、プランを作って実行というなかなか大変な活動をスタッフを軸に、全国からのワーカー、最近は近隣の教会も協力して進めています。

放射能問題支援対策室いずみの働きは、宮城県内を中心とした甲状腺検査の実施、大阪教区派遣の山崎知行医師による健康相談活動、近距離保養プログラムの実施、北海・奥羽・沖縄教区の協力を得ての遠距離保養プログラムの催行、メール配信や講演会等による情報提供、積算線量計の貸し出しなど、多岐にわたります。最近では新聞などにも報じられ、働きが広く知られてきました。健康被害の顕在化がいよいよ心配される一方、原発事故は過去のこととする風潮も強まり、この課題に窓口を開いてニーズに応え続けようとするいずみの働きは重要度を増しています。なお、このたび当教区はアメリカCGMBの理解と支援と共に、会津美里町にある宣教師館を広い宣教の働きのために譲り受けました。近くこの施設を放射能被災から逃れる短期保養施設として活用すべく、現地の会津農村伝道センターを中心に準備を進めています。春からはこの活用もいずみの働きに加わる予定です。

上記エマオといずみの働きには、UMCOR・CBMB・EMSといった世界の諸教会からの資金的支えを頂いています。これに加えて当教区は、全国からの献金を基とする教会救援特別会計より2015年度に計2160万円の支出を見込むと共に、教団に1130万円の補助継続をお願いしています。ご紹介した活動の展開のためには、こうした裏づけが必要です。なおお祈りとお支えを頂きつつ、必要な活動を2017年3月までしっかり展開していきたいと願っています。もちろんその後も、被災地の課題が無くなるわけではありません。それらは、私たち教区・諸教会に託された宣教の課題であり続けます。それがどのような形をとるのか、検討と展望を始めつつあります。

東日本大震災からまもなく4年が経とうとしています。製鉄が盛んであった頃には人口7万人を超えていた釜石市も、高炉の休止や東日本大震災により現在は3万7千人程に減少し、寂しい街となっています。東日本大震災により、死者。行方不明者1,114人、被災住宅4,376棟の被害を受け、復興の途上にある街で、市内には65団地の仮設住宅が作られ、3,100戸を超える住宅に5千名(市人口の13.5%)の被災者が生活することを余儀なくされています。そのような被災した街ではありますが、市中には土地のかさ上げ工事や復興道路の工事が少しずつ進み、新築の家屋もちらほら見受けられるようになっており、未来への展望も開けつつあります。

直近の明るい話題は、まもなく釜石市内で一番大きな復興住宅(156戸)の入居が始まり、新しい生活に展望が開けてきた方の声が聞こえることです。しかしまだ復興住宅への入居が決まらなかったり、以前の居住地が復興工事中で自宅再建の目処が立っていないなかったり、喜ばしい人たちの近くで自分の展望が開けない方たちも多くおられます。新しい生活が始まろうとする方たちも、同じ仮設住宅で一緒に生活をしてきた方々のことを案じて手放しには喜べずにいる現実があります。

ハートフル釜石の活動は2011年8月に遠野センターが設置され、2012年2月から釜石社会福祉協議会と繋がり、9箇所の仮設団地で「お茶っこサロン」としてスタートし、現在12箇所の仮設住宅と1箇所の復興住宅に加え、センターを開放してお茶っこ生活応援を行うまでに拡大してきました。津波被害で全てを流されてしまった方々に、少しでも憩いのひとときとなり、心安らくなるように手芸を通し交流を深めてきました。これから始まる新しい生活においても、お茶っこで覚えた手習いが生かされ用いられることを願いつつ、色々なものを製作してきました。“お茶っこ生活応援”と名付けているのも、お茶っこ(お茶飲み会)だけではなく、将来のことを考え、支援センターであるハートフル釜石が生活再建を応援し、お手伝いすること活動のメインとしていることからの命名であり、この活動の本質はこれからも変わることはありません。

仮設住宅に入居しコミュニケーションがとれるようにな

■上中島復興公営住宅(奥)と仮設住宅(手前)



るのに1年かかったと言われた方がおられました。今後、仮設住宅から復興住宅への移動に伴い、仮設住宅の集約化も始まります。復興住宅は入居者がすべて新しい方であり、コミュニティーを一から作り上げなければならない大変さがありますが、仮設住宅から仮設住宅への移動は、すでに出来上がっているコミュニティーに少数の方が参入していかなければならない大変さがあります。人間関係がこれまで以上に重要になってくる集合住宅で、集合住宅に暮らした経験のない方々が生活を始める大変さをそれぞれの方が抱えておられます。

当センターは甲子川^{かつしがわ}の脇にあり、川沿いの道は適度な散歩コースになっています。気候が良くなれば、近くの方々が散歩ついでにセンターでのお茶っこに顔を出して下さることを願いつつ、本年1月から毎週水曜日にオープンしています。被災者の方々が被災者のままでいるのではなく、お互いに助け合う関係になっていくことを望みつつ、コミュニティーの狭間で苦い思いをしておられる方々の拠り所になればと願っています。

何時かは終焉を迎える教団の支援活動ですが、お茶っこ生活応援に集まっていただけの方々が、自分たちで寄り合いコミュニティーの構築ができ、笑顔で毎日を過ごせるように、種まきが続けていきたいと考えています。被災者でないスタッフは、被災の苦しみを理解することは到底出来ませんが、生活のアイデアを共有しつつ共に歩みたいと企画を進めていきます。復興にはまだ時間がかかります。被災地のことを覚えて頂き、お祈り、ご支援をこれからもお願い致します。

